



DIVERSITY MIE
ダイバーシティみえ

聞いて、見て、感じて。はじめましょう！ ダイバーシティ社会に向けた三重のチャレンジ 「ダイバーシティみえトークイベント」開催報告

2018年5月21日（月）にアスト津のみえ県民交流センターにて「ダイバーシティみえトークイベント」（主催：三重県）を開催しました。

イベントは「聞いて、見て、感じて。はじめましょう！ダイバーシティ社会に向けた三重のチャレンジ」をテーマに、トークや映画を通じて、自分らしく生きることや、ダイバーシティ社会の大切さを感じ、考える機会づくりを目的に開催し、出演者の経験談などを交えたトークに約120人が耳を傾けました。



ダイバーシティ推進のキックオフ

三重県では昨年12月に「ダイバーシティみえ推進方針～ともに輝く、多様な社会へ～」を策定し、県民の皆さんとともに取り組みを進めています。本イベントは、この推進のキックオフイベントとして開催しました。

当日は、まず三重県知事から県のダイバーシティ推進の取組について、県の推進体制や三重県がめざすダイバーシティ社会の姿、取り組む理由や背景、県民の皆さんの取り組み方等を説明しました。

その後、伊賀市出身の映画監督・呉美保さん、トランスジェンダーで東京都渋谷区男女平等・多様性推進会議委員の杉山文野さんに登壇いただき、知事をコーディネーターにスペシャルトークを実施しました。



プレイベント上映会も同日開催

また当日午前には、「ダイバーシティみえトークイベント」のプレイベントとして、呉美保監督の映画「きみはいい子」（2015）の上映会を行い、約50人が鑑賞しました。

映画上映後には、参加自由の“対話コーナー”を実施し、参加者同士が4～5人のグループになり「映画を見て、私が感じた多様性」について伝え合いました。映画の感想だけでなく、自分の職場や生活の中での問題への取り組み方などにも話題が広がりました。参加した人からは「対話することで、自分が気づいていなかった視点や考えを得ることができた」「生きにくい世の中を生きやすくするにはどうすればいいか、考えている人が多いことに気づいた」などの感想がありました。



【出演者】



伊賀市出身
第38回モントリオール世界映画祭
最優秀監督

呉 美保(おみほ)氏
映画監督、脚本家、CMディレクター

1977年 三重県伊賀市生まれ。大学卒業後、大林宣彦事務所PSC入社。2003年『リルモニ』が「東京国際ファンタスティック映画祭/デジタルショート 600秒/泣き部門」にて最優秀賞を受賞。その後、フリーに。2006年映画「酒井家のしあわせ」がサンダンス・NHK国際映像作家賞/日本部門を受賞。2010年映画「オカンの嫁入り」脚本・監督。「新藤兼人賞/金賞」受賞。2014年映画「そのみにて光輝く」が第38回モントリオール世界映画祭最優秀監督賞受賞。2015年映画「きみはいい子」公開。現在は、映像の仕事をしつつ、子育てに奮闘中。



フェンシング元女子日本代表
渋谷区男女平等・多様性推進会議委員

杉山文野(すぎやまふみの)氏
トランスジェンダー
NPO法人東京レインボープライド 共同代表理事
NPO法人ハートをつなごう学校 代表理事

1981年 東京都新宿区生まれ。フェンシング元女子日本代表。早稲田大学大学院にてセクシュアリティを中心に研究し、「ダブルハッピーネス」を講談社より出版。卒業後、2年間で世界約50カ国+南極をバックパッカーとして巡る。帰国後は一般企業に3年勤め、現在は自ら飲食店を運営するかたわら、特定非営利活動法人東京レインボープライド共同代表理事、各地での講演会など活動は多岐にわたる。日本初となる渋谷区・同性パートナーシップ条例制定に関わり、現在は渋谷区男女平等・多様性社会推進会議委員も務める。

知ることによって変わる

伊賀市出身の呉さんは、生まれたときから「あなたは韓国人よ」と言われて育ったので、それを隠す感覚はなく、いじめを受けることもなかったのは、自分がそういう世代だからだと思ってきたけれど、社会に出て、同世代でも育った環境や価値観によって言い出せない人もあることに気づいた経験を話されました。

また、映画「きみはいい子」制作を通し、「声には出せないけれど悩んだりコンプレックスを抱えたりしている人は常に身近にいること」に気づかされたと言っていました。

冒頭の自己紹介で杉山さんは「もともと女子高生をしていましたが、体にずっと違和感があった」と説明。母親にカミングアウトし、いろいろな衝突がありながらも最終的には「うちの子に変わりはない」と認めてくれるまでを当事者の経験談から話していました。

「国籍やセクシャリティなど目に見えないマイノリティがある」と杉山さん。特にセクシャルマイノリティは、自分が言わなければ誰も知らないところから始まります。杉山さんは母親から「(LGBTのことを)知らなかったのよ、ごめんね、でもあなたを知って世界が広がったわ、ありがとう」と言われたエピソードを紹介。知事は「それは、知ることによって変わるということ」と話しました。

多様性は誰の話？

「高齢者、外国人、障がい者、LGBT…。 “ちょっと自分とは違う人”のように言われるが、誰だっていずれ高齢者になるし、海外に行けば外国人の立場になる。“多様性ってみんなの話”と考えられたら、意識が変わる」と杉山さん。セクシャルマイノリティは6~7%いると言われており、40人のクラスなら必ずいることになるため、教育の現場でもセクシャルマイノリティへの理解を伝えることが必要と話されました。

また、呉さんは制作現場において「お母さん」「お父さん」と限定するセリフが変更になったというエピソードから、デリケートに扱いきえぬゆえに多様性とは真逆の方向になってしまっていることを指摘し、むしろ「多様な家庭環境があることを周りが受け入れること」の方が大切ではないかと話されました。

杉山さんは「ダイバーシティ推進に重要なのは “色んな人がいる”で終わるのではなく “だから一緒にやっとう”とインクルージョン(受容)がセットで考えること」、「誰だってマイノリティの部分がある。集まって、マジョリティというグループを作っているだけであり、マイノリティにやさしい社会は、マジョリティにもやさしい社会になる」と話されました。知事は、明るくポジティブに皆さんと一緒に取り組んでいきたいと参加者に呼びかけました。

★「ダイバーシティ」とは…

ダイバーシティは日本語に直訳すると、多様性ですが、県の推進方針では、違った個性や能力をもつ一人ひとりを尊重し、多様性を受け入れることで、個々人では成し得なかった相乗効果を生み出すというダイバーシティ&インクルージョンの意味で捉えています。

★「三重県がめざすダイバーシティ社会」とは…

「性別、年齢、障がいの有無、国籍・文化的背景、性的指向・性自認などにかかわらず、一人ひとりが違った個性や能力を持つ個人として尊重され、誰もが希望をもって日々自分らしく生きられる、誰もが自分の目標に向けて挑戦できる誰もが能力を発揮し、参画・活躍できる社会」と定義しています。